触覚，視覚，聴覚であれ，あるいは対象が勾玉，陶器，鈴の音(ね)であれ，カタチつまり tangible（触知可能で有形）なものにふれて，はじめて感知され認識され，じぶんに取りいれる。この tangible は，三角函数の tangent 正接と同源である。すぐつぎにふれるサピアはいみじくも，発音され，書かれた語に関連して，「ふれて感知されるもの *tactile* feelings」という表現を，1 か所だけだが，さりげなく使っている（1.3.1 を参照。Sapir［1921］1949:11―feelings の複数に注意）。

2.1.1　本居宣長 vs. フンボルト/サピア

本居宣長が文字以前の古代日本語のカタチと格闘し，『古事記伝』（1798）を完成していった頃，いまだ若きフンボルトには公人（プロイセンの外交官，文教府の長）としてのおおきな任務があり，言語研究を一生の課題と定めてはいなかった。のちの「内的・外的言語形式」（1836; 注 28）につらなる重要な「文法形式 formes grammaticales の発生」（1822–23）は，宣長没後約 20 年の発表（朗読）だが，レミュザの中国語文法（1811, 1822）からの刺激があり，裨益をうけたものには新大陸（とくに中南米）からの言語情報があった（3.6, 注 104, 106）。

フンボルトの影響を受けなかったはずのないドイツ人で幼くして合衆国に移住したサピアも，しきりに言語の form を語った。いうまでもなく，言語は ergon（成果・できあがった固成体―泉井）ではなく energeia（はたらき・エネルギー）であるとしたフンボルトにたいし，サピアは 1921 年の『言語』で，「語」をラコニックに定義し，それをすぐさま敷衍して，「語は単にひとつの形態であって，全体思惟を構成する概念的資料を多少にかかわらずその言語の精神が許容する限度までみずからに取り入れているところの，明確に型入れされたひとつの実体である」（泉井訳 30―「型入れ」を安藤訳 59 は「成形」と訳している）[*27] としている。カタチ form としての「語」は，のちにみる（3.6.1），とりわけ複

[*27] ‘The word is merely a form, a definitely molded entity that takes in as much or as little of the conceptual material of the whole thought as the *genius* of the language cares to allow.’（1921［1939:33］）

サピアの “genius” は，日本でも関心を払われている（斉木・鷲尾 2012b など）。「フンボルトの Form は，ギリシャ語でエンテレケイアとよんでいるものとして使われていること，そしてその場合の Form はサピアが genius とよんでいるものと同じである」という考えもある（渡部 1991:92–94）。サピアも formal genius を語ってはいるし，form の energy の他の側面について書いてもいる（Sapir 1921［1939:118］）。しかし，フンボルトとサピアのカタチがエネルゲイアにつながるものであるにしても，Form/form はいぜんとしてカタチ（形態）であって，カタチすなわち genius というの

4.3　用言分割 (ひねり) と再立ち上げ—接尾辞をみわける

本節でのべるのは，用言にはかならずふくまれる境界 – (屈折直前のそれをふくむ) のところで分割 (ひねり) と再立ち上げが可能である，その一方で，境界 = (拘束句内) ではこれができない (たんなる挿入は可能だが)，ということである。これによって，接尾辞と前接語が区別できる。

古来，日本語には用言を連用形 (中断法屈折) におき，“形式動詞”(山田孝雄) などとよばれる「す (る)，ある」につづける構造があった。山田 (1954:『奈良朝文法史』185–186, 188) は，「連用形＋す」を「連体形を以てするものよりはその結體のすすめるもの」(185)，「実用上一の熟語の如き取扱をなすべきもの」(186) と表現している。その一方で，「形容詞は連用形［く］をとりて「あり」につづく」(196–197) と記す。これら連用形と「する，ある」のあいだにそえられうる (「ひねり」をあたえる—後述) 一定の助詞については，「叙述をたすける働き」(『日本国語大辞典』) などが語られてきている—乱れや為［し］なむ人の (万葉集)，わびしくも安流［ある］か (同)，こまやかにはあらで (源氏物語)。

文献資料の豊かな日本語における，これら「用言≠する，≠ある」についての細部におよぶ来源・通時的移りゆきなど，諸種の考究は，もとより専門の方々にお任せするしかないが，現代日本語では，このような連用形につづける「する」と「ある」の後者には，形容詞にくわえて，(近世成立の)「だ」終りの，いわゆる形容動詞がふくまれる (下述) [*131]。ただ，「動詞≠する」構造は下降をたどっていったにしろ，「用言≠する，≠ある」のゆるやかな接合には，(固い複合とちがって) 一定の接語の挿入もあったという言語事実の下地 (支え) がとくに動詞の連用形による分割 (ひねり) と (再) 立ち上げ構造を支えていったのではないかと考えることはできるかもしれない。

問題の「≠する–」に関連した表現については，すくなくとも 3 人の大家 (橋本進吉，服部四郎，大野晋) に言及がある。まず橋本氏は，つぎのような重要な事実を指摘する。「「僕は笑わない」という文の中の動詞「笑ふ」に，助詞「は」又は「も」の類を附けようとしても，そのままでは附けられません。しかし之を連用形にして，「する」という動詞を用ひますと，「僕は笑ひは (も) しない」という風に，「は」又は「も」を「笑ふ」に附け得る事になります。その場合の「する」

[*131] 「山高くして」(vs.「山高くありて」) や「秋深くして」のような，「あり」との“代理［交渉］をなす”「す」(山田『講義』652, 656，『文法論』788–791) はひとまずおく。

連続の意味解釈の問題をひきおこすことがある[*162]。

5.4　日本語名詞屈折論を問う

21 世紀にはいった今日でも，日本語文法の主流派は，名詞のいわゆる格助詞を“屈折形態論”として扱っている。これに当惑を覚えるのは，わたしのような例外的な少数派だけなのだろうか。

最近刊行された『現代日本語文法』全 7 巻（日本語記述文法研究会編 2007–2010）は，「画期的な記述文法」であり，「日本人初の参照文法」であるとされる。「参照文法」については 6.1.1 でみるとして，たしかに日本語としては初の大部な文法ではあり，多くの研究者が参加していることでは壮挙といえるかもしれない。しかし，これは山田文法以来の伝統に沿い，見るところ明らかに寺村秀夫氏の日本語学の延長線上にあって，テーマはあまりにも統語論にかたよっている。2,000 ページをこす全 7 巻のうち，形態論は第 1 巻の 74 ページのみという，日本語文法の要諦部分はむしろ（あるいは意図があってか）はずしたうえで，音声・音韻・音律はまったくない（2.2）という，こういう文法は，典型的な孤立語をのぞくと，他にはお目にかかった経験は記憶にない。ユニークにすぎ，バランスを欠き，どうみても参照文法というのは躊躇される文法である。すでにのべたように（1.4.3 など），人間言語の統語法は，本質的に，形態法にくらべると，おおきくかわりようがない（特異性はうまれにくい）。言語のひくき所の固めをおこたると，ときには，あぶなっかしい構築物ができあがるおそれすらなしとはしない。

かたよりのきわだった統語論はおくとしても，形態論は結局，鈴木重幸説（1972，1996）を基本的に踏襲しているらしい。『現代日本語文法』の編集代表氏は，「いわゆる助動詞・助詞は，単語の構成要素であり，独立の単語ではな

[*162] 古来，解釈が分かれる「おくやまに もみちふみわけ なくしかの こゑきくときそ あきはなかしき［古今集］」を，

a. 奥山に紅葉踏み分け#鳴く鹿の声聞くときぞ#

b. 奥山に#紅葉踏み分け鳴く鹿の#

の a. と読めば，紅葉を踏み分けるのは人間，b. と読めば紅葉を踏み分けるのは鹿である，とされる。これも拘束句の解釈の問題だが，小松（2000:55–56）の「三十一文字の仮名連鎖に 2 首の和歌が組み込まれている，即ち，「奥山に紅葉踏み分け#」で作者が，「奥山に#」で鹿が紅葉を踏み分ける」，という重層構造をとるとすれば，これはカタチをどう解釈するかという問題をこえた，和歌のスガタの問題（2.4）でもあるといわざるをえない。

(注 138 を参照)，宣教師による「発見」の一例である。イベリア半島に源を発し，とくに新大陸に展開されていったこの宣教師言語学については，もとより遺漏のきわめておおい略述にすぎないが宮岡 (1992a:1016–1018) も参照されたい。たとえ記述の質・量や方法に問題があるとしても，生(なま)の言語との格闘がないアームチェア言語学者や，外国人の言語研究にはなから耳を傾けようとしない日本語研究者には，このような分野の言語学がはたしてきた実績のおおきさにもすこしは関心をもっていただければとおもう。

6.4　海図なき「文法の海」をいく—日本語の海を望見しつつ

6.4.1　海へのアプローチ

すでにみたように，日本語にはいくつかの重要な「大文法」につづき，おびただしい数の文法書が書かれてきたが，その主だったものをひもとこうとすると，いまだに諸学説の用語対照表の類を手許におかなければならない不便がある。と同時に，たとえば「行かせられなかった (だ) ろう」といったひとつの動詞 (複合体) をとってみても，文法家によるその分析がまちまちなのが現実であって (注 145)，ひとつの言語の記述としては問題があまりにもおおきい。スケルトン的な文法や入門書の数々はおくとして，現代日本語の参照文法といえる標準的な文法書すらいまだにないのが日本語研究の現状なのである。

文字・文献をもつ言語の辞書づくりと文法づくりは，もちろん文字をもたない言語の調査あるいはフィールドワークとたがいに通じあうところがあるとしても，けっして同じではない。海図のできていない水域を手さぐりで進む航海は，あとから見ればなんでもないと思える困難や障害がつぎつぎと待ちかまえている。

未知の言語のばあいは，「何？」という 1 語を見つけることから調べが始まるというのは，金田一京助にとってのアイヌ語初調査時の実話であったにしても (1964［1931 片言をいうまで］)，これはすでに伝説の類に属する。文字をもたない人々 (民族や集団) は，現在でもまだ数がすくなくはないが，文字の存在じたいを知らない人々は地球上に，すでにいないのが事実であろう。

はるかに現実的な言語調査の細部をうかがうことのできる記録として江湖(こうこ)に名高いのが，カリフォルニア大学の青木晴夫の『滅びゆくことばを追って』